

2段になった千代田堰堤 ... いろいろなところをよく見てみよう

千代田堰堤は、1段でつくられました。しかし、今、千代田堰堤を見ると2段になっています。

千代田堰堤は、農業用水取水せきと川底がけずれて低くなるのを防ぐ施設として、昭和10年（1935）の完成から、何度も洪水にたえてきましたが、少しずつそのダメージを受けました。とくに昭和50年（1975）の洪水の時には、えん堤下流の川底が水の流れて大きくけずられて、そのままではひっくり返るおそれが出てきました。

そこで、よりがんにょうにし、流れ落ちる水の勢いをやわげるため、えん堤を2段にする工事が昭和51～52年（1976～77）におこなわれたのです。

千代田堰堤の「滝」の流れをよく見ると、下から向かって右側（左岸側）にはげしく流れ落ちる場所がありません。えん堤の上はしが落としてあるのです。このすぐ上流に、農業用水を引くための取水口があります。

これは、流れる水の量が少ない時でも、取水口の所に水が集まるようにするための工夫です。

また、昭和51年（1976）の工事の時、魚が川をのぼりやすいようにと、右岸側に魚道もつけられました。

さらに、千代田堰堤のあるあたりでは洪水が流れにくくなっていたことから、平成19年（2007）、千代田新水路がつくられました。千代田新水路には「分流せき」があって、ふだんの水は千代田堰堤へ流し、洪水の時には新水路へも流すということができます。



えん堤の角が落としてあるところと取水口。

右岸側（4）にある魚道。



千代田新水路。

米を食べるのは特別なこと ... 盆と正月とお客さんのとき

明治30年（1897）、鳥取県から池田農場に移住した人たちは、池田へ向かう途中休ませてもらった家の人が、イナキビのおかゆを食べているのを見て、「自分達は郷里で米以外は知らなかったのびっくりした」といいます。（池田農場入地者の『昔をしのぶ座談会』）

入植してからは、「米なんかは盆と正月にしか食べられませんでした。お客さんが来るとやはり米のご飯を出したので、その残りが私達子供に当たるので客が来るのが楽しみ（丸山善二さんの話）」という生活になりました。

開拓者の子どもたちが学校で食べた、弁当の思い出を見つめてみましょう。

「米などは盆か正月ぐらいなもので、普通は稲黍飯に麦やアズキ（小豆）を入れた粗末なものでした（野尻久吉さ

んの話）」

「明治末期に至り、米も試作されましたが主食を充たすことはできず、麦や稲黍が常食で季節には、唐黍や芋、南瓜の弁当もありました。昼近くになると、暖房のいりりの灰の中に芋を入れて焼いたのも思い出の一つです（堀井忠治さんの話：東台小学校開校記念誌『東台の灯は消えず』）」

「弁当は稲黍や唐黍の入った握り飯であった（野村慈弘さんの話：池田小学校『開校六十周年記念誌』）」

「麦や稲黍ばかりで育てられた私はまだ良い方で、十日川の奥から通学していた友だちの中には、毎日の弁当がソバだんごばかりで通っていた人もいたものだ（藤山諭さんの話：下利別小学校『開校六十周年記念誌』）」

（「」の中は『池田町開拓夜話』より）

（「」内、漢字・かなづかいなどは原文のまま）

3 左岸（さがん）：川の下流に向かって見た時、左側の岸のこと。
4 右岸（うがん）：川の下流に向かって見た時、右側の岸のこと。